

95) 服部宗賢 (1752~1820) 文書の研究

Study on Hattori Soken's (1750~1820) Documents

二松学舎大学 町 泉寿郎

Senjuro MACHI

【緒言】服部宗賢は武内博『日本洋学人名事典』等に収録され、また地元奈良県では知名度を持つが、殆ど無名の江戸後期の医者である。今回、家伝文書・著作・旧蔵書・薬籠等を見出し、また関連資料の調査を行って、家世および事績が明らかになったので報告する。

【服部家の歴代】服部家は家伝によれば王仁とともに百済から渡来した呉西素を遠祖として古くから大和国高市郡越（現在の近鉄飛鳥駅至近の明日香村越）に居住した一族で、近世～近代には医業を営んだ。医家としての家世は、①時教朴山—②時伊—③時勝—④時寿宗賢（1752~1820 葛城翁・桂香堂・龍髯館）—⑤時亮宗侃（1778~1833 師菅茶山・荻野・榊林・賀川）—⑥時升宗賢—⑦慶佶（1860~1929 済生学舎卒）。1792年に時寿宗賢が高取藩医となり、既に開業していた時寿の弟孝本養純（1763~1818 和田東郭門、一貫堂）の家系も良純孝里—孝純孝維と医業を継承した。産土神の許世都比古命神社には、1813年に巨勢氏末裔で国学者の幕臣巨勢利和が神社の縁起を撰文し、宗賢が仕えた高取藩主・若年寄の植村家長が揮毫した碑文や、1795年宗賢奉納の鳥居が残る。近鉄線を挟み隣集落の下平田、祐福寺裏墓地には一族の墓石23基があり、越と下平田の境を流れる高取川には1796年に宗賢が流失を防ぐべく架橋した一枚岩の豊年橋が残る。

【服部宗賢資料】武田科学振興財団杏雨書屋蔵：A 家伝文書1函（研1477-1）、214点。B 薬籠1函（研1477-2）、6段の抽斗に下から仁16種・義20種・礼39種・智39種・信38種と別に27種の生薬、筆硯を納める。外面は名物裂を意匠化した蒔絵が施され、薬匙・薬箸・卦算・処方箋用下敷等まで完備。C 処方集『内外治療諸家秘方』1冊（研1419）、宗賢口授・門人濱野宗安筆記。国立国会図書館蔵：D『桂香堂処剂記』9冊（490.9-H345k）。内訳はa 寛政10年正月～、b 享和2年正月～3月、c 享和2年3月～7月、d 享和2年7月～9月、e 享和3年9月～12月、f 文化元年正月～、g 文化

元年9月～12月。a～gは在大和診療記録。h 文化9年7月～の在江戸診療記録。i 文化14～15年在江戸日記。著者架蔵：E『（処方集3種「榊林由仙 紅毛者流外科門、外科正宗」「杉田先生家蔵方」「吉雄永純 映山楼和蘭医書 膏之書・油水薬・升汞丹製法・雑方集・アードルラーテン之書・外科雑記」）』3冊。

【服部宗賢の医学・医療】宗賢の京都遊学中（1766～68）の師に小野蘭山・畑黄山・榊林由仙がある。Cは痔疾・決唇の治法が詳しく、灸治にも及ぶ。所引の医書は『外科正宗』『儒門事親』『導水瑣言』。所引の医家は華岡随軒・吉益東洞・山脇東洋・中西深斎・赤石逸蔵・太田英碩・桂川・恵美・姫井・三上。Eのうち榊林由仙の紅毛流外科は直接の師承によって記録されたものだろう。杉田と吉雄の著書は、D-i「在江戸日記」文化14年12月17日条に、上杉藩医高橋玄益を訪問した際に「杉田玄伯先生家蔵方、并に長崎吉雄家の秘、宇田川玄真の訳書杯拝見」とあり、その伝写経路がわかる。この他にも小野蕙畝、足立長雋、宇田川榛斎、岩崎灌園ら江戸の著名な本草家・蘭学者・蘭方医との交流が知られ、島根藩主松平不昧を施療の際には杉田玄白・桂川甫周・堀本一甫らの知遇も得た。

Dの診療投剂記録は毎節季、新たに番号を起こして記し、在大和の享和中には同国内のほか伊賀・紀伊・河内から年間1400～1500人の患者が受診している（D-b・c・d・e）。江戸でも文化9年7月～の下半期に600人以上が受診している（D-h）。投薬には、一般的な処方名で記す以外に、生薬名を列記する場合もある。湯液治療のほかに灸治も能くした。蘭薬の使用は比較的稀である。「在江戸日記」によれば1日置きに藩邸医務の当番があり、非番の日には精力的に往診を行っている。服部宗賢文書は漢蘭折衷医学の具体相を京坂と江戸、都市と在郷等の問題と併せ考える上で恰好の事例である。